

「発音チェックシート」を用いた発音指導の試み

—学習者の気づきを目指して—

品川なぎさ

要旨

本報告は、学習者に発音に対する気づきを促すことを目的とした、発音指導の実践報告である。独立した発音クラスがない環境の中で、独自の「アクセントシート」「発音チェックシート」「自己チェックシート」を用いて発音指導を行った。その結果、視覚と聴覚で自分の発音を意識し、内省し、そしてそれを正していくという過程の中で、次第に指摘される前に自分で間違いに気がつき、正していくとする行動が観察されるようになった。この気づきによって、発音クラスを離れても自分で自分の発音を正していくことができ、やがては発音の向上につながっていくものと考えられる。

キーワード：発音チェックシート、気づき、聞く力、自己モニター力、意識

1. 現状と問題点

本報告は、学習者に発音に対する気づきを促すことを目的とした、発音指導の実践報告である。

周知のように、発音指導においては学習者の気づき、意識、自己モニターの重要性が報告されており（小河原 1997a、1997b、1999、2002）、自己モニターの養成を目指した発音指導の実践報告が数多くなされている（神山 2005、相馬森他 2005、岡田他 2006、中村 2007）。神山（2005）では、自己モニター力の養成をクラス目標のひとつとし¹⁾、発音練習テキストを用いて授業を行い、課ごとの学習者の発話分析から、学習者が次第に気づき、意識し、自己評価して発音調整を行っていく過程を報告している。中村（2007）では、発音練習テキストをベースに用いた授業を行い、その後アンケートによる学習者の発音に対する意識調査から、協働的学習によって学習者が相互評価できるようになっていったことを報告している²⁾。

上記の実践報告に共通してみられることは、いずれも発音練習テキスト『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』³⁾を使用して、テキストの段階を経るごとに、次第に学習者が自分の発音に気づき、それを意識し、やがて自己モニターできるようになっていったことが報告されている点である。それに対し、

房（2010）では、自己モニタリング力そのものの獲得を目指すことを目標とした実践を行っており、テキストとして『漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ①』⁴⁾を使用して、発音協働学習の効果を報告している。

しかしながら、これまで報告された実践は発音指導のための独立したクラスでの取り組みであり、使用テキストやスケジュールは発音クラスで独立して組み立てられたものである。それに対し筆者が担当した発音クラスは、発音クラスが独立したクラスではなく、日本語クラス⁵⁾と連動して行われるクラスであるため、使用テキストや進度が決められており、従来の発音練習のためのテキストをそのまま使用することはできない。このことから、独自の発音練習用のシート「発音チェックシート」を作成し、それを用いて学習者の意識化を図り、聞く力を養い、自分の発音を内省する力を養い、学習者が自らの発音に気づくということを目標とした指導を試みるに至った。

筆者が担当した発音クラスは、日本語クラスの授業で扱うテキスト本文の予習の意味を含めて、テキスト各課本文の朗読テープを聴きながら、漢字の読みの確認を行い、本文の読み練習を行うことになっている。その読み練習を通して発音指導を行っている。当初は、学習者がテープを聴きながら本文を読み、その発音を個別に聞いてその場で直して回り、特殊拍や母語別の単音の問題など学習者に共通してみられる問題を、発音練習用のテキストを参考にして、ひとつひとつの音の練習をするという方法をとっていた。半年が経過するころには、学習者の中にはテープを暗記するまでになり、テープのモデル発音を真似て完璧に読めるようになるといった学習者もいた。しかしながら、そのような学習者も、練習した読みは完璧であっても、別の読みものや自然な会話になった途端に、発音が指導前の発音となんら変わりがないといったことが多々みられた。更に、日本語クラスとの連動により発音クラスは必修クラスであるため、発音に対する意識の低い学習者は、クラスへのモチベーションが低く、単なる音の正しい発音練習には飽きてしまうといったことが見られた。

1年間のコース開始時と終了時にそれぞれアンケート^{6,7)}とインタビュー⁸⁾を行っているが、この1年間で自分の発音はよくなつたと思うと答えている学生でも、インタビュー結果には、1年間の日本滞在で日本語に慣れたと思われる程度で、1年前と比較して指導の結果として発音がよくなつたといえるだけの成果は表れなかつた。

学習環境によっては、このように独立した発音クラスがない場合や、発音に向き合う十分な授業時間が確保できないという環境もあるのではないだろうか。これまで、発音クラスが単独で設けられていない環境で、発音をどのように指導しているかの報告はない。このような環境の中で、独自の「発音チェックシート」

を用いて発音練習を行った1年間の試みを、以下に報告する。

2. 実践の概要

2.1 学習者

クラスの学習者は、都内私立大学の1年間に在籍している外国人留学生5名（韓国3名、中国2名）である。学習者の日本語学習歴はそれぞれ1年～2年4ヶ月である（表1）。

事前の聞き取り調査で、これまで学習してきた日本語クラスに発音のためのクラスがあったかどうか、またクラスの中でどのような発音練習をしたかについて調査したところ、5名とも、特別な発音のためのクラスはなかったとのことであった。テキストの音読の際に発音を直され、「おじさん・おじいさん」「おばさん・おばあさん」といった練習はしたことがあるという程度であった。

来日前に母国で日本語を学習した学習者は3名（韓国1名、中国2名）で、3名とも、母国で日本語を習った際の担当教員は日本人ではなく、自分の国の教員だったとのことであった。

表1 学習者の日本語学習歴（Kは韓国、Cは中国の学生を表す）

		国籍	学習場所	年数	発音クラスの有無	母国での日本人教師の有無
1	K1	韓国	韓国	10ヶ月	×	×
			日本	1年3ヶ月	×	-
2	K2	韓国	日本	1年	×	-
3	K3	韓国	日本	1年9ヶ月	×	-
4	C1	中国	中国	4ヶ月	×	×
			日本	2年	×	-
5	C2	中国	中国	3ヶ月	×	×
			日本	1年6ヶ月	×	-

2.2 テキスト

発音クラスは日本語クラス⁵⁾の進行に合わせてクラスを進めることになっているため、発音クラスでも日本語クラスで使用しているテキスト『インタビュープロジェクト　日本人の価値観発見』⁹⁾の本文を発音練習に使用した。

2.3 スケジュール

クラスは週1コマ（90分）で、前期15回（表2）、後期15回（表3）の全30回である。

表2 前期スケジュール

回	授業内容	学習項目	資料
1	クラス説明、第2課録音	テキスト、録音テープ	
2	アンケート調査、インタビュー、発音概説①	拍とリズム アンケート用紙、インタビュー発音チェックシート、資料（鹿島）	
3	第2課小テスト、発音概説②	特殊拍 テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭）	
4	第1課録音、発音概説③	清濁・無声化・二重母音 テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭）	
5	発音概説④	アクセント テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭、戸田）、1,2課アクセントシート	
6	第1課小テスト、第3課録音、発音練習(1)	テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭、戸田）、1,2課アクセントシート	
7	第3課小テスト、発音練習(2)	テキスト、録音テープ、1,2,3課アクセントシート	
8	中間試験、第4課録音	テキスト、録音テープ、4課アクセントシート	
9	中間試験フィードバック、発音練習(3)	テキスト、録音テープ、中間試験アクセントシート、自己チェックシート	
10	第4課小テスト、第10課録音、発音練習(4)	テキスト、録音テープ、4、10課アクセントシート、自己チェックシート	
11	母語別発音指導（韓国語、中国語） 発音練習(5)	清濁音、撥音、促音、「つ」音、 「さ、す、ぜ、ぞ」音 資料（戸田）	
12	第10課小テスト、発音練習(6)	テキスト、録音テープ、4,10課アクセントシート、自己チェックシート	
13	期末試験	録音テープ	
14	期末試験フィードバック	録音テープ、期末試験アクセントシート、自己チェックシート	
15	アンケート調査・再インタビュー	録音テープ、アンケート用紙、インタビュー発音チェックシート	

表3 後期スケジュール

回	授業内容	学習項目	資料
1	第5課録音、発音概説①	アクセント（復習）	テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭）、5課アクセントシート
2	第5課小テスト、第6課録音、発音概説②	イントネーション	テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭）、5,6課アクセントシート
3	第7課録音、発音概説③	イントネーション	テキスト、録音テープ、資料（田中・窪蘭）、7課アクセントシート
4	第6課小テスト、発音練習(1)	テキスト、録音テープ、6,7課アクセントシート、自己チェックシート	
5	第7課小テスト、発音練習(2)	テキスト、録音テープ、5,6,7課アクセントシート、自己チェックシート	
6	中間試験、第9課録音	テキスト、録音テープ、9課、中間試験アクセントシート	
7	中間試験フィードバック、発音練習(3)	テキスト、録音テープ、中間試験アクセントシート、自己チェックシート	
8	第9課小テスト、第11課録音、発音概説④	俳句のリズム テキスト、録音テープ、資料（戸田）、9,11課アクセントシート	
9	スピーチ練習	各自のスピーチのアクセントシート	
10	第11課小テスト、第8課録音、スピーチ練習	テキスト、録音テープ、8,11課アクセントシート、自己チェックシート	
11	スピーチ練習	各自のスピーチのアクセントシート	
12	第8課小テスト、発音練習(4)	テキスト、録音テープ、8,9,11課アクセントシート、自己チェックシート	
13	期末試験	録音テープ	
14	期末試験フィードバック	録音テープ、期末試験アクセントシート、自己チェックシート	
15	アンケート調査・再インタビュー	録音テープ、アンケート用紙、インタビュー発音チェックシート	

発音クラスでは、日本語クラスの進行に合わせて、テキストの各課ごとに本文の朗読テープを録音し、音読練習し、各課の終わりには小テスト（本文のディクテーションと読み）を行うことが義務付けられている。それらの合間に、概説という形で発音知識の導入を行い、発音練習を行った。発音知識の必要性は戸田（2001）でも述べられており¹⁰⁾、限られた学習時間の中で効率よく発音を学ぶには、日本語の発音を体系的に学ぶことは必要であると考えられる。

発音知識の導入は、前期に①拍とリズム、②特殊拍、③清濁・無声化・二重母音、④アクセント、後期に⑤イントネーションという順に行った。概説は鹿島（2002）、田中・窪蘭（1999）、戸田（2004）、松崎・河野（1998）を参考に資料を作成した¹¹⁾。概説の中で例として取り上げた語彙や文は、その週に該当する課のテキスト本文の中から取り上げた。概説の発音練習として扱った語彙や文も同様である。

上記の概説の中でも④アクセントに重点を置くようにした。なぜなら、これまでの発音クラスでの経験から、音の高低の聞き取りは学習者によっては困難な場合があり、時間がかかることが想定されたためである。また、音の高低の感覚を

身に付け、アクセントの基本的な規則を覚えることによって、初めて聞いた語彙でも規則に則って音の高低を考えて発音できるようになり、仮にそこで間違えて発音してしまったとしても、音の高低の感覚が身に付いていれば聞いた時に自分で直すことができると考えられるためである。

上記の概説の他に、前期に 1/2 コマ（45 分）ずつ、韓国語母語話者クラスと中国語母語話者クラスとに分けた母語別の発音概説を行った。韓国語母語話者クラスでは清濁音、「ざ、ず、ぜ、ぞ」音、「つ」音の概説と練習を、中国語母語話者クラスでは清濁音と撥音の概説と練習をそれぞれ行った。

更に、前期・後期それぞれのコース開始時と終了時にアンケート¹²⁾とインタビュー¹³⁾を行った。アンケートの目的は、コース開始時と終了時の学習者の発音に対する意識の変化を調査するためである。インタビューの目的は、ひとつは学生の発音の特徴を調査するため、いまひとつはコース開始時と同じインタビューをコース終了時に行い、コース開始時と終了時での学生の発音を比較するためである。そのためインタビューはコース開始時と終了時で同じものを使用した。

2.4 発音練習の手順

発音練習には、テキスト各課から本文の一部を使用した。聴覚だけでなく視覚的にも確認できるように、語彙をひらがなで表記したシートを作成し、それを「アクセントシート」（資料 1）として、以下のような手順で練習を行った。

発音練習の手順

- ① 「アクセントシート」に普段自分が発音している通りにアクセント記号を書く。
- ② モデル発音を聞きながら「アクセントシート」にアクセント記号を書く。
- ③ アクセント記号の正解を見ながら、モデル発音を聞きながら、答え合わせをして正しい発音を「アクセントシート」に書く。
- ④ ③の正しいアクセントを声に出して練習する。
- ⑤ ③の正しいアクセントを確認しながら、テキスト本文を読む。

「アクセントシート」にアクセント記号を書きこむ際、自分の最初のアクセント型（手順①）、聞いて書き取った型（手順②）、正解のアクセント型（手順③）、それぞれを違う色のペンで書き込むようにさせ、書き込んだ型は答え合わせをした後も消さないように指導した。その理由は以下の 2 点からである。ひとつは、どのアクセント型のときにどのような間違いをしているのかなどの自分の傾向を知ることができるようにする、いまひとつは、正しく聞き取ることができるようになってきたときに、練習当初の「アクセントシート」と比べて間違えのチェック箇所が少なくなっていることが視覚で確認でき、聞き取りの力がついたことを

実感することができるようになるためである。

発音練習で使用した本文の箇所は、各課の読みの小テストに用い、発音の確認をした。小テストは録音をし、各学習者にフィードバックした。教師は学習者の発音をチェックしたものをシートに作成し、それを「発音チェックシート」(資料2)として各学習者に配布した。「発音チェックシート」には、正しい発音と、その学習者の発音とを併記した。学習者の発音は、アクセントの間違いだけでなく、特殊拍や単音そのものに問題がある場合も、その音が教師にはどのように聞こえたかということを、ひらがなやアルファベットで記した。例えば、「大きな」→「おきーな」、「日本語」→「nyon ご」、「年」→「にえん」などである。シートを学生に配布する際に、それらの音を教師が再現し、教師の耳にはこのように聞こえているのだということを伝えるようにした。学習者はシートを見ながら自分の録音テープを聞くことによって、どこでどう発音していて、それが正しい発音とはどのように違っているのかということを聴覚だけでなく視覚的にも確認できるようになっている。教師は発音練習の際に、「発音チェックシート」で指摘した箇所が正しく発音できるようになっているかモニターしてまわった。単音そのものに問題があり、自分の発する音が違っているということが理解できたとしても、その音を正しく発音することができないといった場合は、調音点を確認するなどの指導と发声練習を個別に行った。

初回から中間試験までは教師が作成した「発音チェックシート」のみであったが、中間試験以降は「自己チェックシート」(資料3)を配布した。これは、試験の録音後、学習者本人が録音テープを聞いて発音の間違いを自己チェックするためのものである。まず「自己チェックシート」で発音を内省し、それから「発音チェックシート」とを見比べて、テープを聞きながらチェックを行うようにした。この「自己チェックシート」への記入は学習者の気づきを促すために行ったものである。教師から指摘された箇所だけを直すのではなく、自分の発音のどこがおかしいのか、意識して自分の発音を聞き、自分で考えるということの積み重ねを通して、次第に気づきが増えていくと考えたからである。

3. 指導前と指導後の変化

3.1 学習者の評価

コース終了時のアンケート⁷⁾を見ると、この1年で自分の発音は「とてもよくなつたと思う」(K2、K3、C2)、「少しよくなつたと思う」(K1、C1)と感じていることがわかった。その理由は以下の通り。

学習者	コメント
K1	今まで自分の発音について考えたことがなく、自分が間違った発音をしていることも分から

	なかった。今は自分の発音のどこが悪いか、自分の発音の特徴は何かが分かるようになり、そこを意識して話したり聞いたりするようになった。
K2	これまで日本語の発音について全く気にしたことがなかった。このクラスを受け、自分の発音やアクセントに多くの間違えがあったことに気付いた。普段会話する時、自分がきちんと発音しているかどうかが気になる。
K3	どのように発音するかを考えることができるようになった。
C1	1年前は自分の発音のどこが違うのか全く分からなかつた。今はまだ正しい発音はできないが、間違えたところが分かるようになり、自分で訂正することができるようになった。
C2	日本語を話す際、発音が正しいかどうかを考えるようになった。清濁、長音などに気が付くようになった。

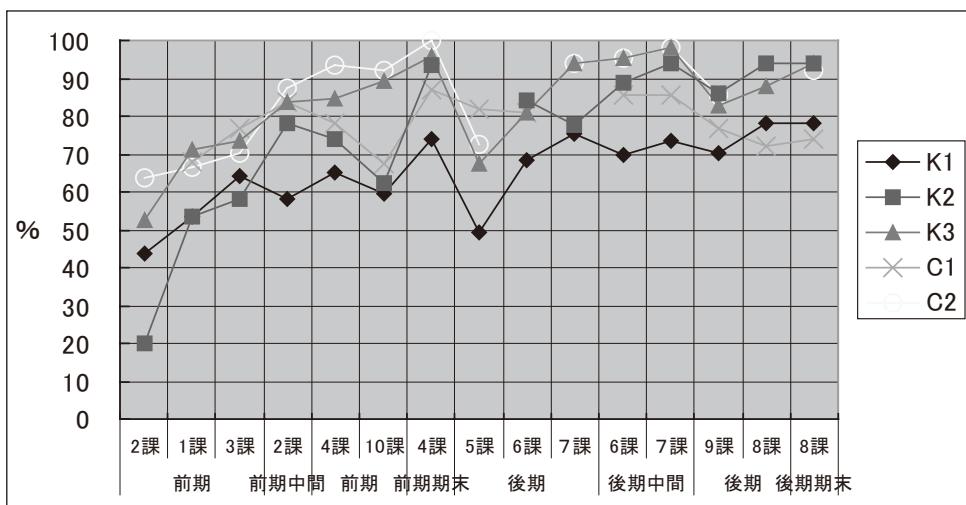
1年間録音した自分のテープを聞き、当初と比べればよくなっている、という印象を5名全員が持ったことが窺える。

概説とその練習については、「必要だと思う」「基本的な知識を身につけて発音練習をはじめた方がいい」「母語とかかわる自分の弱いところがよくわかつた」「概説が発音練習の役にたった」「概説があったので、日本語の発音や自分の発音を早く理解することができた」と答えており、発音知識が発音する際の助けになり、気づきを助けていることが窺える。

3.2 学習者の発音の変化

次に、学習者の発音の変化についてみてみる。各課の「発音チェックシート」(資料2)でアクセントの正答率をみてみると、前期の2課からはじまって後期に進むにつれて、正答率が上がっていることがわかる(表4)。グラフが途切れている箇所(K2の5課、C1の7課、C2の6課)は、該当課で学習者が欠席したことによるものである。

表4 アクセントの正答率



上記グラフを見ると、後期の始まりの5課で、一旦全員の正答率が下がっている。これは約2ヶ月の夏休みを挟んだことが原因として考えられる。このことから、時間が空くと発音は元に戻るとも考えられるが、正答率が下がったとはいえ、後期の初めは前期の初めより正答率が高いこと、前期と後期の正答率の平均を見ても（表5）、後期の正答率の方が高いことがわかる。

表5 正答率の平均（数字は%）

	K1	K2	K3	C1	C2
前期	60	63	79	77	82
後期	70	88	88	80	90

のことから、1学期の15回程度の練習では維持できるほどの効果はないが、年間を通しての継続した練習により、正しい発音へ導いていくことが容易になっているといえる。

次に、学習者のコース開始時と終了時のインタビューを比較し、その発音の変化を見てみる。コース終了時のインタビュー⁸⁾では、「私」「住所」「電話番号」といった語彙にアクセントの改善、特殊拍などの改善が見られ、発音に迷って何度も言い直すという場面が多く見られた。例えば、「私」では、「わだし、あっ！わたし！」と言い直す場面や、「電話番号」では、「でんわばんご、ばんごー」と言い直すという場面である。このような自己訂正の場面の回数を見てみると、コース開始時では5名とも0回であったのに対し、コース終了時では5名の平均自己訂正の回数は8回であった。

発音に迷う、言い直すといった行動は課を重ねることに増えている。「自己チェックシート」（資料3）を見ると、初めはどこをどう直してよいのか分からず、ほぼ白紙で提出していた学習者もいたが、回を重ねるごとに、どうおかしいのかということはいえないが、なんとなくここがおかしいと感じるといった箇所が増えていき、次第にそこがどうおかしいのかを指摘することができるようになり、更にモデル発音を聞けばすぐに適切に訂正できるようになっていった。

本実践以前の発音クラスの結果では、アクセントの正答率には年間を通してのばらつきがみられ、学習者の中には本実践で得られたような右肩上がりにはならなかった学習者もいた。同様にコース開始時と終了時のインタビュー比較でも、変化はほとんど見られず、発音に迷う、言い直すといった行動は全く観察されなかった。この比較からも、本実践によって、学習者が自分で気がつき、自分で直していくことができるようになってきたと考えられる。

4. まとめと今後の課題

学習者の発音への気づきを促すことを目的とし、「アクセントシート」「発音チェックシート」「自己チェックシート」を用いた発音指導を行った。その結果、視覚と聴覚で自分の発音を意識し、内省し、そしてそれを正していくという過程の中で、次第に指摘される前に自分で間違いに気がつき、正していくとする行動が観察されるようになった。この気づきによって、発音クラスを離れても自分で自分の発音を正していくことができ、やがては発音の向上につながっていくものと考えられる。

本実践のように独立した発音クラスではないことは一見デメリットにも見えるが、他の日本語クラスと連動していることから、発音クラスでの練習が即、他の日本語クラスでも生かされるといったメリットがあることを、本実践を通して確認した。発音練習で使用しているテキストが他の日本語クラスと同じなので、日本語クラスでの本文の音読みの際に困らないといったことや、発音練習したものを見た際にはそのまま生かせるといったメリットがあった。発音クラスでの練習の成果を、他のクラスすぐに実践することができ、成果を感じることができるとということは、学習者のモチベーションにもつながっていくのではないかだろうか。また、発音知識の導入の際に練習で扱った語彙・表現も、本文の中の語彙・表現であることから、単なる音の正しい発音練習よりも飽きがなく、効率がよく負担が軽いといえる。本実践以前の学習者のアンケートでは、何度も同じ音の練習に飽きた、その音は正しく発音できるようになっても他の言葉にその音ができても正しく発音できない、といった記述があったのに対し、本実践でのアンケートでは、すべての記述が概説とその練習の必要性を感じているものであり、それは練習が実践で生かせていることを裏付けるものといえる。

今後は、学習者のその後の発音追跡調査を行うなど、気づきの成果を検証していく必要があると考える。

注

1. クラスの目標は「1」日本語の音韻構造の知識を増やし、発音に対する理解を深める。2」日本語による音声表現力を向上させ、一般の日本人の聞き手にも、聞きやすくわかりやすい発音の習得を目指す。3」自己の発音の問題点に気付かせ意識化することにより、自己モニタリング能力を育成する」(p.132)としている。
2. 「本発音授業は、初めから協働的学習を目指したものではなく、ここで協働的学習が行われたと断言することはできない」(p.186)との断りを入れているが、ペア活動を意識的に増やしたことによって、学生の中に評価基準ができていったことが報告されている。
3. 戸田貴子 (2004)『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

4. 泉文明 (2002) 『漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ①』国際文化フォーラム
5. 日本語クラスは、四技能（読む、聞く、話す、書く）を取り入れた総合的なクラスで、1コマ90分を週3コマ行っている。

6. コース開始時のアンケートは以下の通りである。

- 1) 今までどのくらい日本語を勉強しましたか。
①機関 ②年数
- 2) 日本語の勉強で何が一番大事だと思いますか。大事だと思う順に番号を書いてください。
①文法 ②読み解き ③作文 ④ヒアリング ⑤発音（単音） ⑥アクセント ⑦イントネーション ⑧スピーチ ⑨その他
- 3) 今までの日本語クラスで、どのような発音練習をしましたか。
- 4) 自分の発音をどう思いますか。具体的に発音できない（苦手だ）と思う音、言葉があつたら書いてください。また、日本語の先生や日本人から指摘されたことがあつたら書いてください。
- 5) 日本語を話すときに気をつけていることはありますか。

7. コース終了時のアンケートは以下の通りである。

- 1) この1年で自分の発音はどうなったと思いますか。
①とてもよくなかったと思う ②少しよくなかったと思う ③変わらない ④あまりよくなかったと思わない ⑤悪くなかったと思う ⑥分からない
- 2) 1番でそう思う理由はなぜですか。自由に書いてください。
- 3) 1番で①と②に○をつけた人はお答えください。自分の発音がよくなかったと思う点はどこですか。
①アクセント ②イントネーション ③拍・リズム ④促音 ⑤長音 ⑥撥音 ⑦その他（例：「ざ」の音）
- 4) 自分の発音で問題があるのはどの点だと思いますか。
①アクセント ②イントネーション ③拍・リズム ④促音 ⑤長音 ⑥撥音 ⑦その他
- 5) 4番で○をつけた点について、具体的にどういった問題があると思いますか。思うところを自由に書いてください。
- 6) 発音向上のために自分が積極的に取り組んだことは何ですか。
①日本人と日本語で話すようにした ②日本人の発音をまねするようにした ③授業で録音したテープを家でも聴くようにした ④教科書を声に出して読むようにした ⑤自分の発音を友人や知人に直してもらうようにした ⑥自分の話した会話を録音した ⑦その他
- 7) 授業の内容についてどう思いましたか。感想を書いてください。
①概説について ②練習方法について ③母語別の発音練習について
- 8) 授業の感想を自由に書いてください。

8. コース開始時と終了時のインタビュー項目は以下の通りである。

- 1) 氏名 2) 電話番号 3) 住所 4) 名前の由来 5) 道案内 6) 文を読む
①子供の時からシャープペンばかり使っていたので、えんぴつを削るのは初めてです。
②授業が終わって、お姉さんと一緒に時計を買いに行って、それから家に帰りました。
③日本語の期末試験には口頭試問があります。
④近年、世界では禁煙が叫ばれています。私はたばこが嫌いなのでうれしいです。
⑤学校にビール瓶が落ちているなんておかしなことです。
⑥冬になると寒風が吹き、なぜかパンが食べにくくなります。
⑦私は活発な子供でしたので、よく柿の木に登って遊んでいました。
⑧私は字が汚いので、日本で習字を習いたいです。
⑨彼はラグビーで転んでしまい、病院でレントゲンを撮ったら骨折していたそうです。
⑩雑誌には『空中ブランコ』という本が若い人に人気があると書いてありました。

9. 山下早代子・小川早百合（1994）『インタビュープロジェクト　日本人の価値観発見』くろしお出版
10. 戸田（2002）では、アクセントの知識がアクセントの知覚に与える影響について、「日本語アクセントに関する音韻知識の導入と発音練習を行うことにより、アクセント核が付与される音節位置の判断がより正確になったと言える。（p.84-85）」と述べている。ここではアクセントについてのみ言及されているが、アクセント以外の発音の諸要素についても同様のことが言えると考えられる。
11. 概説は以下のような内容を日本語で行った。
- ①拍・リズム：学習者の母語である韓国語と中国語でそれぞれ1拍になる語を挙げてもらい、それが日本語の拍感覚で数えた場合には何拍になるかなどを紹介し、拍感覚が日本語と母語とでは違うということを確認させるような活動を行った。日本語の拍の特徴や2拍をひとまとまりとするリズムの取り方についてなど、それぞれ例を挙げて解説を行った。
 - ②特殊拍：長音、促音、撥音について、それぞれの特徴を紹介し、発音の際の注意点を解説した。例えば促音では、促音の含まれる語を挙げてもらい、それぞれの音の違いを意識させ、同じ促音でも後ろにくる音によって無声の状態になったり、有声の状態になったりすることを確認するような活動を行った。
 - ③清濁、無声化、二重母音：清濁については、日本語の清音と濁音を紹介し、語中の無声音と有声音の混同、語頭の有声閉鎖音の無声化など、母語別にみられる問題点について具体例を挙げて紹介した。無声化と二重母音については、どういった場合に無声化するのか、どのようなものが二重母音なのかを例を挙げて紹介し、発音の際の注意点を紹介した。
 - ④アクセント：アクセントの特徴、機能、型（平板、頭高、中高、尾高）について、いくつか語彙を挙げて説明し、そこから見えてくるアクセントの規則や、発音の際のポイントについて紹介した。日本語のアクセントにおいて音の高低がいかに重要であるかということ、そしてそれが発話においてどれほどの重要性をもつかということを確認した。外来語、複合名詞、形容詞、動詞、助詞のアクセントについても同様に例を挙げて説明した。
 - ⑤イントネーション：文中の語のアクセントを確認してから、その文を朗読したテープを聞き、どこにイントネーションの「ヤマ」があるかを確認する作業を行った。イントネーションの「ヤマ」の形の規則や、どのようなときにイントネーションの「ヤマ」の数が増えるのかなどの解説を行った。
12. 本実践以前と同じインタビュー（注6、7）を使用した。
13. 本実践以前と同じインタビュー（注8）を使用した。

参考文献

相馬森佳奈・吳我泳・栗原玲子・富樫依子・中野玲子・平林奈美・山中都（2005）「コミュニケーションのための発音指導実践」『早稲田大学日本語教育実践研究』第2号, pp.125-134.

- 岡田亜矢子・朴愛京・朴美娥・雷宝茵（2006）「コミュニケーションのための発音指導実践」『早稲田大学日本語教育実践研究』第4号, pp.117-126.
- 小河原義朗（1997a）「発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について」『日本語教育』92, pp.83-94.
- 小河原義朗（1997b）「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』第1号, pp.27-38.
- 小河原義朗（1999）「外国人日本語学習者の日本語発音不安」『言語科学論集』第3号, pp.13-24.
- 小河原義朗（2002）「自己モニターの促進を目指した音声教育」『小出記念日本語教育研究会論集』10, pp.164-167.
- 鹿島央（2002）『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク
- 神山由紀子（2005）「コミュニケーションのための発音指導実践－学習者の気付きと意識化を迫って－」『早稲田大学日本語教育実践研究』第3号, pp.131-140.
- 田中真一・窪塙晴夫（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版
- 戸田貴子（2001）「発音指導がアクセントの知覚に与える影響」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』14, pp.67-88.
- 戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 中村則子（2007）「発音クラス授業報告」『東京外国语大学留学生日本語教育センター論集』第33号, pp.179-140.
- 房賢嬉（2010）「韓国人中級日本語学習者を対象とした発音協働学習の試み－発音ピア・モニタリング活動の可能性と課題－」『日本語教育』144号, pp.157-168.
- 松崎寛・河野俊之（1998）『よくわかる音声』アルク

資料1 アクセントシート

■ 第2課			
ときよーは(東京は)/	せかいいち(世界一)/	やかましー(やかましい)/	まちだ(町だ)/
だれかが(誰かが)/	いっていた/	ニューヨークに/	りょこーした(旅行した)/
ことは/	あるが/	すんだ(住んだ)/	ないから/
どちらが/	そーおんに(騒音に)/	みちているか(満ちているか)/	しらない(知らない)/
しかし/	せかいの(世界の)/	なかで(中で)/	ひどく/
いくつかの/	わかる/	きがする(気がする)/	まちかどに(街角に)/
たつと(立つと)/	いろいろな/	みみに(耳に)/	とびこんでくる(飛び込んでくる)/
こじの(工事の)/	おとと(音と)/	じどーしゃの(自動車の)/	おとが(おとが)/
まず/	あっとーべきだ(圧倒的だ)/	それらの/	ために/
ほかの/	さまざま/	きえてしまう(消えてしまう)/	くらいである

資料2 発音チェックシート

■ 第2課

- 正しい発音： とーきょーは せかいいちやかましまちだと だれかがいっていた。
○さんの発音： とーきょーは せかいいちやかましまちだと だれかがいっていた。
- 正しい発音： オオノシは ニューヨークにりょーしたことはあるが すんだことばみから
○さんの発音： オオノシは ニューヨークにりょーしたことはあるが すんだことばみから
- 正しい発音： ニューヨークとーきょーが どちらがそーおんこみちているか しらぬ。
○さんの発音： ニューヨークとーきょーが どちらがそーおんこみちているか しらぬ。
- 正しい発音： しかし とーきょーがせかいのなかで ひどくやかましまちのひとつだ
○さんの発音： しかし とーきょーがせかいのなかで ひどくやかましまちのひとつだ
- 正しい発音： とうことは わかるきがする。
○さんの発音： とうことは わかるきがする。
- 正しい発音： とーきょーのまちかどゴつと いろいろなそーおんが みみにとびこんでる。
○さんの発音： とーきょーのまちかどゴつと いろいろなそーおんが みみにとびこんでる。
- 正しい発音： こーじのおとと じどーしゃのおとが ますあつとーてきだ。
○さんの発音： こーじのおとと じどーしゃのおとが ますあつとーてきだ。
- 正しい発音： それらのおとのために ほかのさまざまなおとは きえてしまうくらいである。
○さんの発音： それらのおとのために ほかのさまざまなおとは きえてしまふくらいである。

資料3 自己チェックシート

■ 第2課

とーきょーは せかいいちやかましまちだと だれかがいっていた。
わたしは ニューヨークにりょーしたことはあるが すんだことはないから
ニューヨークとーきょーが どちらがそーおんにみちているか しらない。
しかし とーきょーがせかいのなかで ひどくやかましまちのひとつだ
ということは わかるきがする。
とーきょーのまちかどにたつと いろいろなそーおんが みみにとびこんでる。
こーじのおとと じどーしゃのおとが ますあつとーてきだ。
それらのおとのために ほかのさまざまなおとは きえてしまうくらいである。

(尚美学園大学非常勤講師)